

創立 25 周年と「天平のひろば」 100 号発刊の年を祝う

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

平素より会員並びに関係者の皆様におかれましては、NPO 平城宮跡サポートネットワークの運営にご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

2026 年は干支の丙午にあたり、「勢いとエネルギーに満ちて活動的になる年」と言われています。

万事物事がうまく行くよう「人間万事塞翁が馬」の精神で、皆さまの望みが叶う年となることを願っています。

さて、本会は本年 11 月 1 日に創立 25 周年を迎えます。とともに会報誌「天平のひろば」は会発足と同時に創刊し、年 4 回定期的に刊行し、本年秋号でもって 100 号に到達する運びとなります。

これも会員諸氏の長きにわたる努力と積み重ねの結果、そして、奈良文化財研究所始め、国営飛鳥歴史公園事務所、平城宮跡管理センターなど皆様の格別のご支援のお陰と感謝申し上げる次第でございます。

さて、来年 5 月に第 77 回全国植樹祭が平城宮跡で開催されます。私たちが日頃活動の場としているフィールドに、県内外から大勢のお客様をお迎えできることは大きな喜びです。

今日の平城宮跡の美しい環境は、25 年間、地道に継続してきたクリーン活動の成果といえます。本年も多くの環境関係団体との連携と近隣市民との協働により、この素晴らしい自然環境を守って参りたいと思います。

また、平城宮跡から出土した古代瓦や木簡或いは「かりうち」の普及活動は、主にイベント参画型で実施していますが、更に奈文研や管理センターと共同した幅広い文化財公開事業となるよう着実に活動を進めていきます。

一方、資料館といざない館における歴史講座を年間 15 回開催し、毎回、ほぼ満席となるほど好評を博しております。平城宮跡ファン醸成に向け、更に工夫して開催していく積りです。歴史公園ガイド事業は、「奈良時代を今に感じる」のコンセプトを踏まえた語り部として、これまでに 19 万 5 千人に語り部に語ってきました。

本年 3 月には国交省の東楼工事の完成が予定され、さらに、復原事業へのご理解を歴史公園ガイドを通して広げて参ります。

本年も皆さまのご指導ご鞭撻のほど
どうぞ よろしく お願い申し上げます。

(鈴木浩 NPO 平城宮跡理事長)

第 5 回かりうち対戦試合

11 月 24 日朱雀門ひろばで奈文研/管理センターの協力で NPO 平城宮跡は、第 5 回かりうち対戦試合を開催。

最初に奈文研小田祐樹主任研究員、高橋千奈津同研究室長の挨拶、説明で奈良時代の盤上ゲームかりうちは、前回以上の盛り上がりを見せていました。

(文化・ガイド部会)



朱雀門ひろばで盤上ゲーム(左:経験者、右:初心者)

遺跡見学会(飛鳥・藤原の宮都を巡る)

12 月 6 日 13 名は、奈文研発掘調査部藤原地区林正憲研究室長の案内で世界遺産登録を目指す飛鳥・藤原の宮都を巡る遺跡見学会を実施しました。文武天皇陵とされている中尾山古墳や飛鳥資料館開館 50 周年記念「飛鳥池工房」では林研究室長の熱の入った解説に耳を傾けていました。

(文化・ガイド部会)



前列左が林正憲研究室長

第54回平城宮跡歴史文化講座が11月16日資料館講堂で113名に「古代の対外戦争(その2) 対蝦夷戦争」と題し講演。



蝦夷とは律令国家成立期に東北・北海道地方に住み律令国家の支配に組み込まれていない人々で国家の版図拡大と蝦夷の抵抗で対蝦夷政策の基本は城柵の設置、郡の設置(移民の送り込み)で征夷・鎮狄(戦争、征討)は副次的手段だった。

斉明朝の阿倍比羅夫の北方遠征(660年)などは平和的に共存、朝貢を促すものだった。また遷都や政権交代などを契機に膨張の機運が高まった。

大宝律令発布後の708年出羽柵(庄内平野)を造営、712出羽国が成立。膨張と移民政策への反発が起こり、709年に7カ国から徴兵、征夷を行うも大規模な戦闘はなし。この後陸奥国で大規模な移民政策を実施、713年には大崎平野(宮城県北部)に郡を設置し、支配を強化した。

720年に反乱が発生、征夷将軍、鎮狄将軍を派遣、短期間で制圧した。律令国家側はこの征討を契機に、陸奥国が一国で蝦夷支配を行える体制(租税軽減、他地区の併合、軍の常駐化、多賀柵の創建等)を構築。その効果か、724年に海道(海の近く)の蝦夷の争乱はあったが、774年まで大きな反乱は発生せず。ただ733年の出羽柵の北進(庄内から秋田市)、737年からの多賀柵と出羽柵間の交通路開削等、北進活動は継続し蝦夷との摩擦は続く。758年には藤原仲麻呂が対新羅征討計画と並行して対外積極策へ転換。出羽国に雄勝城、陸奥国に桃生城を造営し北進拠点を強化、762年には多賀城を改修。仲麻呂失脚後の称徳・道鏡政権も積極策を受け継ぎ、767年にはさらに北に伊治城(栗原市)を造営。こうした積極的な支配領域の拡大は蝦夷の不満を蓄積していく。774年から811年までの間に計画のみを含め10回の征夷が行われ、後に三十八年戦争と呼ばれる。始まりは774年の海道の蝦夷による桃生城襲撃で、778年には服属した蝦夷(俘囚)の協力も得て沈静化した。しかし780年には俘囚伊治公咎麻呂(あざまろ)が同僚との私怨に端を発して多賀城、伊治城を焼くなど、大規模な反乱を引き起こす。737年以来、43年ぶりに大規模

な征討軍が投入され沈静化した但膠着状態が続いた。781年桓武天皇即位。784年の長岡遷都と軌を一にして征討を計画するが実施に至らず。789年に征夷軍を派遣するが蝦夷の阿弭流為(あてるい)の術中にはまり、多くの犠牲を出したまま終了。794年には平安京造営に時期を合わせて、坂上田村麻呂らを送り一定の成果を得る。

801年田村麻呂を征夷大將軍に任命、大軍を送り胆沢・志波を完全に制圧。阿弭流為らは802年に降伏、都に送られ処刑された。これで蝦夷支配の最前線は大きく北進。さらに804年に征討が計画されるが政権内の論議を経て、対蝦夷の軍事政策は停止へと大きく転換した。811年嵯峨天皇の代となっていたが、北進した地域の安定を図るとして、征夷が計画されたが沙汰止みとなる。双方とも決定的な勝利は得られぬまま、前線を南下させるなどして、終結が宣言され軍事的緊張は解かれた。

こうして蝦夷にとっては迷惑この上ない対蝦夷戦争は終わるが、国家財政の窮乏化も招き、律令国家の支配方式の変質・転換をもたらした。(編集部)

平城宮跡歴史文化講座(資料館講堂)

2月15日:市 大樹(大阪大学大学院人文学教授)

「古代の対外戦争(その3) -白村江の戦い-」

2025 どんぐり拾い大会

11月3日に朱雀門ひろばで恒例のどんぐり拾い大会を開催。3班に分かれた80人が30kgのどんぐりを拾い、奈良の鹿愛護会に贈呈しました。今年は葉っぱでアートを催し、子どもたちは、どんぐり拾いをした後、もっとやりたいと楽しんでいました。(文化・ガイド部会)



どんぐり拾い準備中(鹿さんスタンバイ)



←朱雀門ひろばの賑わい



立石堅志さん（奈良市主任学芸員）が、11月8日 97名の参加者を前に「古代国家と射礼（じゃらい）」と題し、講演。



射礼は、臣下の服属と君臣秩序を表現する儀礼で中国から伝わってきた。元日朝賀や相撲節会（すまいのせちえ）と共に宮中の重要な儀式である。日本書紀には483年に初めて行ったと

書かれているが、実際は大化改新以降と思われる。

天皇の列席のもと当初は高位の官人が宮内で行ったが、天武天皇の時代になると全ての官人が宮の南門で行った。射手の地位や的中した的の場所でそれぞれに相当する褒美が与えられた。続日本紀は毎年行っていることは書かないが、平城京遷都後の713年に大極門で大射を行ったと書かれている。恭仁京から還都後の759年以降は内射と書かれているが内裏で行ったのではないだろうか。日本書紀や続日本紀には射礼を行ったことや場所は書かれているが、どのように行ったかわからず、平安時代以降の儀式書や絵巻を参考にするしかない。後白河天皇は保元の乱後の宮城の再興や儀式の復興を絵巻に描かせた。鎌倉時代以降は武士の儀礼として続けられた。（編集部）

横山 舜さん（奈文研建造物遺構研究室 AF）が12月13日123名の参加者を前に、「近世京都の寺院造営と奈良の古代寺院」と題し、講演。



奈良帝室博物館は、片山東熊がネオバロック建築を参照して設計されたが、周囲の景観や当時の社会と調和していないのではという批判を受けた。一方、旧奈良県庁は長野宇平治が瓦葺き屋根や鴟尾を

取り入れた伝統的スタイルと中庭を取り囲んで部屋を設けた近代的平面構成を融合させた。その後、奈良物産陳列所や奈良ホテルも西洋の古典主義建築と伝統的スタイルなどの過去を意識し、奈良にふさわしい近代建築を模索して建築された。中世の寺院の再建では、興福寺が過去の規模や形式を踏襲したのに対し、東大寺は過去を大事にしながら新技術の大仏様を採用し、後の建築様式に多大な影響を与えた。近世京都での、仁和寺の再興は、応仁の乱後150年以上経過した1634

年、家光の伽藍再興の申し入れにより造営計画が検討された。寺は文書を調査し東寺や高野山、興福寺金堂の建築様式を参考に図面を作成した。資金面などで、難航している中、内裏紫宸殿が下賜されることになり計画は大きく変わった。

しかし、収集した情報と計画は引き継がれ、内外陣を持つ本堂の再興は実現された。

このように過去の様式と向き合いながら新たな建築が実現されているのであり、歴史的繋がりがあることがわかる。（編集部）

木原明彦さん（奈文研解説ボランティア）が、1月10日参加者121名を前に「復元模型でみる東大寺大仏殿のしくみ」と題し講演。



大仏殿は奈良時代に創建され戦火で焼失し鎌倉時代、江戸時代に再建された。

創建時は、桁行11間、梁行7間で母屋の周囲に庇をめぐらし、外観は主屋と裳階で二重屋根に見える。

鎌倉期は内陣柱・入側柱・側柱とも全て大屋根まで通し柱として、各柱間を貫で縦横に固める。裳階は無くし、初層に腰屋根を設ける大仏様である。

江戸期は裳階付きで、桁行を11間から7間に縮小する。主要構造部は鎌倉時代の大仏様を採用するが近世の建築技法も取り入れ、正面の裳階屋根に「唐破風」を付ける。柱は集成材である。再建途中で桁行を縮小したが施行済の柱は残したため、裳階屋根と上層屋根の勾配は大きく異なる。江戸期に再建された大仏殿は傷みが激しく、明治時代に大修理が行われた。大虹梁を鉄骨トラスで補強するなど構造を補強した。屋根荷重の削減のため葺き土を撤去し瓦枚数も削減し、唐破風も瓦から銅板に変更し、鳥衾を鴟尾にした。

昭和時代には雨漏りが激しくなり、屋根の葺き替え工事を行った。（編集部）

次回の平城京 歴史講座(いざない館)

2月14日：内藤航（奈良博文化財課研究員）

「仏像の彩り『南都仏画』に寄せて」

3月14日：田中裕子（大阪歴史博物館学芸員）

「難波宮跡内裏地区の発掘成果と公園整備」

4月11日：松井一晃（橿原市文化財保存活用課補佐）

「菖蒲池古墳の歩んだ道」

あちこち見て歩き

⑪ 大和の俳人 橋本多佳子

東京生まれ（1899—1963）。大正6年建築家・実業家の橋本豊次郎と結婚して小倉に住む。大正11年長崎旅行から東京に戻る高浜虚子を小倉の自宅・櫓山荘に招いた際、虚子の即吟に感激し杉田久女に俳句の教えを受けた。徐々に力をつけ、昭和2年『ホトトギス』に初入選。その後、山口誓子に師事し水原秋桜子が主宰する『馬酔木』の同人となった。昭和12年に夫が死去。この時初めて多佳子は「俳句は人生を滅ぼすこともあるが、絶望から救ってくれる不思議な言葉の結晶体である」と実感した。終戦直前あやめ池に住み始め、昭和21年、西東三鬼・平畑静塔と3人で奈良登大路の日吉館で句会を



日吉館句会(左の2人目が橋本多佳子)

始めた。この句会は「日吉館句会」と呼ばれるようになって、新しい仲間も加わり、昭和28年まで続いた。

毎月第一土曜日に米2合を持参し、一人10句以上を持ち寄った。冬は炬燵に足を入れ、夏は男性が裸で必死に俳句と向き合い、お互いに歯に衣着せない論評をし合った。何不自由なく暮らした奥様時代とは無縁の厳しい世界に悪戦苦闘した40代～50代であった。この句会でめざましく成長し、花を咲かせたのが多佳子だったのである。昭和26年第3句集『紅糸』のほぼ半数は日吉館の激論の中から生まれた。

星空へ店より林檎あふれをり

雄鹿の前吾もあらあらしき息す

箸をとるときはたとひとりや雪ふり来る

多佳子の句の特徴は、夫との死別を経験したことで、女性の自我や哀しみ、不安などを繊細に時には、力強いタッチで表現したことである。

雪はげし抱かれて息のつまりしこと

月光にいのち死にゆくひとと寝る

また生涯奈良の古社寺や伝統行事も繰り返し詠み、

万燈の一つが消えて闇あそぶ

修二会走る走る女人をおきざりに

などの佳句がある。戦後を代表する女流俳人となり、1963年肝臓癌のため64才で終の棲家となったあやめ池の自宅で死去。遺作の一句

雪はげし書き遺すこと何ぞ多き

(河野良子)

平城宮跡を“楽しむ”人たち

歴史公園ボランティアアガイド新規募集説明会/令和7年度歴史公園ガイド研修会を実施

昨年12月13日に歴史公園ガイドボランティアガイドの募集説明会を開催。13名のガイドの申し込みがあり、1月17日10時から研修会を開催しガイドマニュアルに基づいて、ツアーガイドと各施設のガイドのポイントの説明を行い、いざない館入館手続きと今後のスケジュールの説明がありました。

1月31日にベテランガイドによる現地研修会を実施し、4月から仲間としてガイドを行います。

1月17日令和7年度歴史公園ガイド研修会を開催、6期生を含め62名の参加があり、鈴木浩NP0平城宮跡理事長から、公園ガイドの活動体制について、華表洋二平城宮跡管理センター室長から、ガイド活動運営上の周知事項について、遵守願いたい旨、説明がありました。

その後、奈文研横山舜AFの第一次大極殿院東楼の研究について、(株)竹中工務店橋本慧作業所主任の同東楼工事の工匠の技(みどころ)について、講演がありました。(編集部)



歴史公園ガイド研修会(その1)



歴史公園ガイド研修会(その2)

新規会員の紹介/募集

※新規会員の紹介* (1月1日現在) 新規加入なし。

❖新規会員の募集 <活動支援/入会のお申し込み>

※個人会員が支援/活動 年会費 3,000円

※法人会員が支援/活動 年会費 10,000円

◆お申込み: ☎ & FAX 0742-34-7713

編集後記

2026(令和8)年は「午」年。行動的なエネルギーに満ち、勢いと挑戦の年になると言われています。皆様にも大きく飛躍する機会に恵まれる一年になりますように。(Y.S)